

山梨県総合計画審議会第4回教育文化部会 会議録

1 日 時 平成22年1月27日(水) 午前9時30分～11時30分

2 場 所 ホテル談露館「アンバー」

3 出席者

・ 委 員 (50音順、敬称略)

飯窪 さかえ	池田 政子	上名 をさみ	窪内 節子	田村 悟
鶴田 一杏	鳥海 順子	長谷川 義高	深沢 修	深澤 光江
保坂 精治	堀内 直美			

・ 県 側

知事政策局長 県民室長 教育長
(事務局：知事政策局) 政策参事 政策主幹

4 傍聴者等の数 3人

5 会議次第

- (1) 開会
- (2) 部会長あいさつ
- (3) 知事政策局長あいさつ
- (4) 議事
- (5) 閉会

6 会議に付した議題 (すべて公開)

- (1) 「チャレンジ山梨行動計画 変更計画」について
- (2) 各分野の今後の施策について
- (3) その他

7 議事の概要

(1) 議題 (1)～(2)について

議題(1)に関し、事務局から、議題(2)に関し、各部局長等から資料1の「Ⅲはぐくむ・やまなし」の2事業について説明した後、次のとおり意見交換を行った。

(委員)

今の世の中は、今までの教育の失敗がこういう日本をつくっていると思う。その教育政策がいまだに続いている。貧しくても、平和な住みやすい日本にしていくために必要なお金を使ってもらいたい。今の政府はコンクリートから心、人間にお金を使うと言っている。本当に必要なところに使ってほしい。

特別支援教育に関して、知的障害で入学する子ども達は激増している。25年間はそのままで推移する。現場は非常に大変である。ぜひ、支援をお願いしたい。

(教育長)

「特別支援教育プランの策定に向けた検討」を、今回、行動計画に追加した。

(委員)

キャリア教育というと職業訓練というか、そういうものに通じる何か教育をするような意味にとられがちである。低学年では、それ以前のものづくりということに重点を置いてもらいたい。

(教育長)

キャリア教育というのは、その定義というところになると大変難しいものがある。人生にはいろいろな局面に直面して、それでもなお強く生きていかなければならないという現実がある。人間は、夢を持てば苦勞があっても頑張れる。そのためには、努力もしなければならないという職業観、勤労観の育成がその方向である。

(委員)

施策の方向に、特別支援教育を入れてもらって良かった。今、幼稚園とか保育所にも特別な支援を必要としている子ども達がたくさん入ってきて、現場の保育の先生方が、大変対応に困惑している。そういうところまで含めて、教育という意味合いを広げ、教育委員会だけではなく、例えば児童家庭課とかそういう部署も含め、幼児も対象にした特別支援教育保育プランというような検討をしてもらえると、現場の先生方は大変助かる。

(教育長)

他部局との連携が大変重要であるということは言うまでもないことである。今後、教育委員会サイドとしても意を用いていきたい。

(委員)

まず、高校教育の充実ということに関して、今、大学は、普通高校だけでなく、通信制、商業高校、工業高校等からも、多くの学生が入ってくる。普通高校以外から大学に入ったときに問題になることは、IT関係とか簿記とかのスキルは身に付いているが、基礎学力、例えば漢字が読めない、レポートが書けない、語学ができない。そういう基礎学力、いわゆる普通の学習という機会がなかったという感じがする。専門的なスキルを身に付ける高校に入っても、大学に行く生徒がたくさん出てくるので、基礎的な学力を身に付けさせる機会を与えてもらいたい。

また、図書館に行って、本を見て、それから選ぶというのでは、大変時間が掛かるので、新県立図書館の情報システムには、住民が図書館のホームページで蔵書を検索でき、予約することで、読みたいものが既に用意されているというシステムにしてももらいたい。

(教育長)

5教科7科目の基礎、基本がしっかり定着しているということが重要。高校の3年間は非常に忙しい。たくさんの方のことを詰め込まなければならない現状が、高校に課せ

られている。また、大学受験や大学では、精度の高いものが求められている。単なる知識を詰め込むのではなくて、論理的に自分で考えを構築して自分で学ぶ。そうしたゆとりがあれば良いが、現実問題としては苦しい。公立の学校に課せられた使命は、最先端の技術等に対応できる力と伝統的な価値観を教えるということ。

新県立図書館の情報システムの基本設計では、ネット上で蔵書を検索し、すぐに閲覧できるようなシステムも入っている。

(委員)

国家百年の計は教育にあり。教育は知育、徳育、体育だと思う。今の日本の教育は、知育といっても受験学力を付けさせている。体育も成果主義に陥っている気がする。心の教育が大事だと言いながら果たしてなされているのか。学校では、道徳教育が本当になされているのか。家庭教育、学校教育の中で、今、日本で欠けているのは道徳教育だと思う。

教育は何のためになされるか、われわれ人類が少なくとも滅びるような方向にいかせない教育。日本に住んでいて、幸せだと思う教育にするのが教育だと思う。ぜひ、山梨県こそ、真の教育をやっている県にしてもらいたい。

(委員)

新県立図書館の機能が見えてこない。例えば、生涯学習センターとの機能の関わりとか、県立博物館や県立文学館の蔵書との関係はどうなっているのか。また、地域の図書館は非常に充実している。新県立図書館は、そことどこが違うのか。どこにカラーがあるのかを、もう少し県民や学校現場にわかるように示していく必要がある。

(教育長)

新県立図書館は、気軽に入れて交流もできるという施設。県民全員のコンセンサスを得ることは難しいが、多くのニーズに対応したいというのが一番大きな基本的な考え方である。また、図書館なので、どのような蔵書があるのかが生命線だと思っている。

(委員)

図書館については、県民が本当に親しめるような総合的な機能を持ってほしい。高校教育では、魅力ある高校づくり、活力ある高校づくりが基本的なもの。人間として、また社会人としての能力を身に付け大学に進んでいくよう、キャリア教育において、系統立った人材の育成を検討してもらいたい。地域連携という点をキャリア教育という面から突っ込んで研究してもらいたい。

(教育長)

高等学校の地域との連携ということについて、歴史的に見てだんだん希薄化というか、連携が薄れてきている。

やはり親、教師、社会全体が道徳教育の教材そのものであり、子ども達はそこから学んでいる。そういう意味で、地域と学校が連携して子ども達を育てる。一つの同じ方向に向かってスクラムが組めたらと願い、学校応援団という施策を組んだ。

(委員)

キャリア教育の推進という研究事業が、文科省から1年間ということの下りてきた。先生方も短い時間の中で組み立ててきた。私たちも地域の人間として関わってきたが、1年で終了するともったいない気がする。そういうところに予算を付け、その成果が積み重ねられるようなことができないものか。

また、ドメスティック・バイオレンスということについて、デートDV。携帯電話を使ってデートを誘う。いろいろ低学年化しているということで、高校生とか大学生ではなくて、もうちょっと年齢の低い、小学生の時から教育の中でも啓発していく必要がある。

(教育長)

研究指定校、あるいはモデル授業については、国の事業であり、その実施期間の変更あるいは延長というのは大変困難である。キャリア教育の推進というのは、家庭と教師の意識改革と発想の転換にかかる部分が非常に大きい。予算化されてのモデル事業でなくても、学校でその後も継続して、そういう意識でやっていくことが可能である。

情報モラルについては、学校でも強化している部分。家庭との連携が、ぜひとも必要なところである。家庭においても、それをモニターするのは親権を有した親が一番有力である。

(委員)

図書館の機能の点で、山梨関係資料のコーナーができるということで大変期待をしている。教育関係と関連付けて、ここに来れば、山梨県に関するありとあらゆる資料がすぐに入手でき、学校教育で活用できるというようにしてもらいたい。例えば、学校で郷土について知りたい時、それが一つのユニットとして、コンテナで学校に届けてもらえるシステムがあると、教員の負担も減り、資料の充実も図れる。新県立図書館がセンターになって、それぞれの地域の図書館を経由しても良いと思う。

その中に、図書とか資料以外に、人材活用ということで、語り部を人材登録をしてもらえると、地域の人材活用が更に広がっていくのではないか。

(教育長)

新しい図書館に行くと、県民が知りたい全てのことがあるとは言えないかもしれないが、少なくとも県内において、質・量共に最高峰である。市町村の図書館とのネットワークも、ぜひとも視野に入れていきたい。

総合的な学習の時間として、調べ学習をする時間がある。その時に、県立図書館は最強の武器となる。博物館、美術館、文学館等を合わせ、新しい図書館にも、学校の子ども達が学校のコンピュータを使ってどんどん入ってこられるようなものであればいいと思っている。

(委員)

学校にしても図書館にしても、地域の文化の中心であるということを前提にして、ぜひ人数割りだけで、統廃合することは極力避けてもらいたい。

(教育長)

国では、学年が80人というのが一つの設置基準。それを下回ると、いろいろなことがある。1学年120人、3学年で360人となると、学校のやり方次第で、十分な活力がつく。

数を前面に出している理由は二つある。一つは規模が小さいと教育課程が充実できないこと。もう一つは、クラブ活動の選択肢が減ってくることである。

(委員)

学校の再編が子どもに与えた影響は大きい。学力が下がった時期に学校に入った生徒は、先輩方とかに嫌われることもあった。再編に当たっては、いろいろな場面を考えて、学校の充実を図ってもらいたい。

もう一点、栄養教諭の配置は、どの程度拡大するのか。

(教育長)

今、指摘があったように学校の学力が下がってしまうといった意見も承知している。やはり学校間格差であるとか、校内の学力格差というものは生じてくるところがある。ただ、一人一人の子どもが、行った学校でベストを尽くしてもらうことが基本であると考えます。

栄養教諭については、8名くらい増員できる。栄養教諭の配置は、今後も推進していく。

(委員)

やはり教育は、家庭教育が大事である。ぜひ、先生の資質を上げてもらいたい。それには、採用時にしっかり面接をして、学歴だけでなく人間的な評価で採用してもらいたい。いい先生方が、しっかりした教育をしてもらうことが一番大切である。

今、教育に害を及ぼすものは、くだらないテレビが多いこと。ろくなテレビをやっていないということが非常に残念である。放送面からも、日頃の教育の資質アップということも考えてもらいたい。

(委員)

10数年前と今の学校では変わっている。ものすごくいろいろな問題を抱えている。

学校現場では、連絡を取りたい家庭とはなかなか連絡が取れない現実がある。来てもらいたい親は、いろいろな事情で来てくれない。そういう状況のとき、スクールソーシャルワーカーとかスクールカウンセラーが出向いてくれる。

これからの行政のサービスというのは、困ったら相談に来なさいということではなく、専門性を生かして家庭にも悩み解決のために出向いていく。そういう時代に、行政は変わってきている。

(委員)

山梨ブランドの知名度が低い。東京に居て思うことは、山梨県の天気が分からない。NHKの全国ネットで、東京、八王子、次に来るのは長野。甲府がなぜないのか、非常に立腹している。県からもNHKに言ってもらいたい。

山梨県の医学部を出ても、ほとんどが東京に行ってしまう。今は、医療が専門的になっているので、自分の能力を伸ばすため、東京の優秀な先生方のところへ行く。それで、山梨県に居なくなってしまう。山梨県の一番良いところは、東京に近いのに田舎の良さというものがあるということ。山梨県に戻ってもらうため、県で在宅医療を有効に推進すれば、医者もそういうところに行きたいと思う。そういう意味で医者主導ではなく福祉、心理、看護師さんなどが地域の中で、在宅医療を盛り上げていく。そういう中で、医者に戻していくことを考えてもらいたい。

(2) その他

事務局から今後の審議日程について説明し、了承を得た。